

小学校における学級内 SNS の可能性

鈴木 秀樹*1

Email: soundx@u-gakugei.ac.jp

*1: 東京学芸大学附属小金井小学校

◎Key Words 学級内 SNS, Edmodo, 学び合い

1. はじめに

「児童に SNS を使わせる」と言うと、「いじめに繋がるのではないか」「犯罪に巻き込まれるのではないか」「時期尚早ではないか」といった反応が返ってくることが多い。しかし、児童にとって SNS は「いずれは使うもの」であろうし、使ってみれば便利な部分も多い。であるならば、正しく使うための教育が必要であると考える。

他方、発表者の勤務校では、ICT 機器が十分に整備されている状況にない。しかし、アンケートを取ったところ、保護者の多くはスマートフォンを利用しており、ネット接続環境を全く持っていない家庭はないことがわかった。

そこで、家庭での利用を前提に、担任している学級（小学校 2 年生）では、1 年生の時から Edmodo によって学級内 SNS を構築し、様々な場面で活用してきた。

ここでは、学級内 SNS 上で展開される活動が児童の学習に与える効果を明らかにする。

2. 学び合いの実現

2.1 学び合い

学級内 SNS を用いて実現したかったのは、児童の「学び合い」である。

例えば国語の場合、現小学校学習指導要領では「書いたものを読み合い、よいところを見つけて感想を伝え合うこと。」という記述があり、新小学校学習指導要領でも「文章に対する感想を伝え合い、自分の文章の内容や表現のよいところを見付けること。」という記述があることからわかる通り、「学び合う」ことは学習の一つの姿として定着したものと言えるだろう。

しかし、実際にはこうした「書いたものを読み合う」ような学び合いを教室で実現することは容易ではない。1 クラスに 35 人の児童が在籍しているとして、その 35 人が文章を書いた場合、他の 34 人が文章を読むことになるわけだが、どのような方法を取るにしても、そんなことは授業時間内には到底、実現できない。したがって大抵の場合、教師は「グループの中で読み合いなさい」等の指示をして授業時間内に収まるような学び合いができないかを模索することになる。

これも一つの「学び合い」であることに違いはないだろうが、本来であれば 34 人から意見をもらえる可能性があり、34 人に意見を伝えられる機会があるのに、それを捨てていることになる。

学校における「学び合い」は、十分に機能させるこ

とが難しい状況にあると言えるだろう。

2.2 学び合いを阻むもの

学校における「学び合い」を阻んでいるのは、学校が持つ特性ではないかと筆者は考えている。

イリイチは学校を「特定の年齢層を対象として、履修を義務付けられたカリキュラムへのフルタイムの出席を要求する、教師に関連のある過程」⁽¹⁾と定義したが、これは別の言い方をすれば「いつ、だれが、だれから、何を、どうやって、どうやって」学ぶかが決められているということになるだろう。

こうした制約を定めることで、学校が効率的な学びを実現する機関でありえたことは否定しないが、それによって阻害されるものもある。「学び合い」はその一つではないか。時間に制約がなければ 35 人が 34 人の作文について意見を言うことも可能になる。こうした「学校の特性によって阻害された学び合い」の復権が、学級内 SNS によってなら可能になるのではないか。この仮設に則って行った 2016 年の実践について報告する。

3. 実践報告

3.1 学級内 SNS 構築の準備

学級内 SNS は、学校と児童、学校と保護者との間に新しいコミュニケーション・チャンネルを作るものである。これが何か新たなトラブルを引き起こさないかを心配されることも多いので、学校組織の中で認められ位置づけられることが欠かせない。本研究の場合、このオーソライズを得ることに 1 学期間を費やした。

また、本研究における対象児童は小学校 1 年生であるため、学級内 SNS を始めるにあたっては保護者の協力も欠かせない。4 月のうちにアンケートを取って、インターネット接続環境を持たない家庭は無い、ということはおわっていたので、学校の了解を取り付けた後、7 月に行われる 1 学期末保護者会で学級内 SNS について説明をした。そして、夏休みのうちに Edmodo のアカウントを取得し、グループに参加するよう依頼した。

3.2 学級内 SNS の周知

9 月からは、保護者が学級内 SNS に慣れる期間とした。児童に利用させる場合も、保護者の協力や監督は欠かせないので、まずは保護者に慣れてもらう必要があるからだ。それには保護者が毎日、学級内 SNS にアクセスしたくなるようなコンテンツが必要であると考え、毎日、その日の学習内容や学級内の出来事を書いて

Edmodo に投稿するようにした。1年生の保護者にとって、そうした情報は有用であったようで、9月から10月にかけて保護者の学級内 SNS の利用、理解は広まっていた。

3.3 展覧会の事前学習に利用

東京都美術館で開催された「ゴッホとゴーギャン展」に、スペシャルマンデーというイベントを利用して11月に鑑賞することが決まっていたので、その事前、事後学習に学級内 SNS を利用した。

この展覧会では肖像画が多く出展されていた。特にゴッホの自画像は3枚、出展されていたので、学級内 SNS にその3枚の画像（美術館から提供されたもの）を掲載し、どれが一番好きかを投票してもらった。タイピングは難しいが、数字を入力するだけなら1年生でもできるだろうと考えてのことである。結果は予想通りで、保護者のサポートを得つつ、こうした「自分でも入力できる」コンテンツを体験することによって児童の学級内 SNS への親しみは増して行った。

3.4 展覧会鑑賞後、感想文を読み合う

展覧会鑑賞後、児童には国語の時間に「自分のお気に入りの一枚」についての作文を欠かせた。書き上がった全員の作文と、その作文で扱われた作品を学級内 SNS にアップロード（図1）した。その上で児童に期限を3週間とって「全員の作文を読んで、全員の作文にコメントを残す」ことを課した。

コメントを残すには当然、タイピングが必要であるが、それは1年生にはできないので保護者の協力を得る必要がある。だが、事前学習で「自分で入力」して学級内 SNS に投稿していた児童は、保護者に打ってもらった場合でも「これは自分の文章」というこだわりをもって投稿するようになっていた。

結果、3週間の期限を迎える前に、35人が34人にコメントするという課題が実現された。

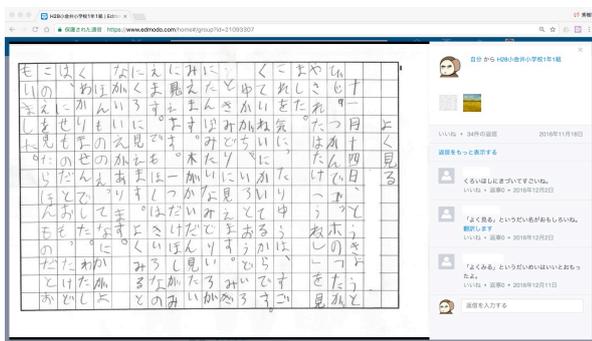


図1 作文をアップロードした学級内 SNS の画面

3.5 コメントの分類

児童のコメントは、概ね以下の4種類に分類することができた。

賞賛 「えのなかにいるみたいということばいいとおもいました。」というように、その作文の

良いところを賞賛するもの。

賛同 「わたしも、しぜんがきれいだとおもいました。」というように、自分も同意見であることを伝えようとするもの。

発見 「わたしはわらのいえにはきづかなかったです。」というように、自分の知らないことが書かれていたことを評価するもの。

意見 「そうかなー。そらのいろが、みずいろだけかな。ぼくには、いろんないろがあるようにみえたよ。」というように、作文に対して自分は違う考えであるということ伝えようとするもの。

4. 評価

学級内 SNS を利用することによって、学級の35人が他の34人の作文を読み、コメントをつけられる環境を構築し、また実際に児童がそのように活動することができた。このことは前述の学校の持つ制約の一端を取り払うことに繋がったと言ってよいだろう。

また、この活動によって児童の学び合いが実現されたことも成果の一つと言えるだろう。「賞賛」「賛同」「発見」「意見」のように分類できるほどの児童のコメントを授業時間内で取り上げることは不可能であり、これを学校の教室での授業で取り上げることで、児童の学び合いは更に促進されることにもなった。これは教室での学びだけでは実現できなかったこととして評価したい。

5. 今後の課題と可能性

学級内 SNS を構築することで児童の学び合いを実現できることはわかったが、これが長期的に児童の資質・能力に対してどの程度、寄与していくのかは、現時点ではまだ明確なことは言えない。引き続き学級内 SNS を運用して観察を続けていく必要があるだろう。

また、学級内 SNS が児童の情意面でどのような影響を与えているのかも注視していく必要がある。あまりにも学習に直結したコンテンツばかりだと児童は学級内 SNS にあまり魅力を感じなくなってしまうし、ある程度は自由に使わせる中で小さなトラブルが起こった方が SNS でのマナーを学ばせる上では意味がある。運用する上でのバランスの取り方が難しい部分である。

こうした課題を注意深く観察し、解決していきながら、より良い学級内 SNS の活用方法を考えていきたい。学級内 SNS によって学校が「いつでも、どこでも、子どもが、友だちと、思ったことを、伝え合って」学ぶ場を提供できるところに変容することが究極的なゴールと言えるだろう。学級内 SNS が、これを部分的にでも実現できる技術であることを実践研究を通して今後も実証していきたい。

参考文献

- (1) イヴァン・イリッチ：“脱学校の社会”，p.59，東京創元社（1977）。